

会長講演「放射線看護のかたち～変わらないもの、 変わりゆくもの～」

Framework of radiological nursing: What remains the same and what is changing

日本放射線看護学会第10回学術集会 会長

野戸 結花

Yuka NOTO

弘前大学大学院保健学研究科

Hirosaki University Graduate School of Health Sciences

2021年9月18日(土)から10月17日(日)の会期で第10回学術集会を開催した。今回、COVID-19の収束が見通せないことから、昨年に引き続きWeb開催とし、2日間はオンライン配信、その後1か月間をオンデマンド配信とした。会期中は19の学術発表、9の交流集会のほか、会長講演、基調講演、特別講演、3つの教育講演、教育セミナー、2つのリレーシンポジウム、スペシャルインタビューを配信し、243名の参加を得た。ご参加をいただいた皆さま、ご講演をいただいた演者および座長の皆さま、ご支援をいただいた企業の方々、そして、本学術集会の企画・運営に精力的に取り組んでくれた委員に心より感謝申し上げたい。

本学術集会は「放射線看護のこれから 創成とサステナビリティ」をメインテーマとし、これを受けて会長講演のテーマは「放射線看護のかたち～変わらないもの、変わりゆくもの～」とした。以下、会長講演でお伝えした内容の一部を紹介する。

1. 放射線看護の枠組みと“変わらないもの、変わりゆくもの”

2011年に発生した東京電力福島第一原子力発電所事故は、放射線看護に大きな転機をもたらした。これに留まらず、COVID-19の感染拡大、加速する少子高齢化に伴う深刻な社会保障財源の不足、巨大災害・複合災害による不測の事態などにおいても、その時々々の社会情勢や時代のニーズに応じて放射線看護が担う役割は変化していく。その一方で、多くの先達によってつくられ、支えられ、受け継がれてきた、変わらない、変えることのできない放射線看護の原点もある。

放射線看護の範囲はどこまでか？ 甲論乙駁かと思うが、私が考える放射線看護は多様な領域をカバーする。がんで放射線治療を受ける患者とその家族への看護という従来の狭義の枠を超え、その範囲は、IVR治療や核医学診療、放射線診断を受ける対象者とその家族への看護、放射線被ばくによる健康影響に不安を持つ対象者への看護、放射線診療に携わる医療者の被ばく低減と不安への対応、さらには、原子力災害・放射線事故時の緊急被ばく医療、被災住民や防災関係者、事業者などへの長期的なかかわりまでをも包含する。つまり広義の

放射線看護は、対象と空間的・時間的な広がりをもつと考える。この背景には、放射線被ばくを心配する人々は組織反応が生じる恐れのない被ばく量であっても、生涯にわたりがんなどの確率的影響への不安をもち続けることになる、といった放射線特有の性質が関係している。範囲の拡大の一方で、看護のゴールであるところの「生命の質を維持するためのケアを通して、その人らしく生きることや生きる力を支える」ことに変わりはない。

II. 放射線看護の新たな視点

放射線看護の拡大に伴い、「放射線防護」と「放射線リスクコミュニケーション」を新たな放射線看護の視点として着目したい。放射線の利用は、人類に大きな恩恵をもたらすと同時に、用い方によっては生物や環境に障害をもたらす。そのため、放射線の利用にあたっては「放射線防護」の視点を持つことが必須であり、これがなければ、安全で安心した放射線利用ができない。そして、「放射線リスクコミュニケーション」は放射線利用の「安心」の部分を支える重要な役割を果たす。

放射線看護の対象となる人々は放射線の将来的な健康影響について不安を持つ者も多い。それは、自身の身体についてであり、子どもたちへの影響であり、将来の子孫への影響である。過度な不安により合理的で適切な判断が妨げられ、意思決定や日常生活に悪影響を及ぼすといったケースもある。放射線看護に携わる看護師は、不安が少しでも軽減でき、その人の人生にとって望ましい選択ができるように支援する必要がある。この時「放射線リスクコミュニケーション」がひとつの方策として有用となる。放射線診療での被ばく不安を持つ対象者に対しては、その放射線診療によってどの程度の被ばくをするのかと健康影響に関する見積もりを伝え、放射線診療のメリットとの間で折り合いをつけ、気持ちの落としどころを探っていくことになる。原子力災害・放射線事故では被ばくのメリットがない。被ばくによる将来の健康影響への不安について、生活との兼ね合いで折り合いをつけることになる。折り合うことのできるラインは個人で異なることから、その人がラインを探るために役立つ科学的情報を伝えていくことが必要になる。このとき、一方的に科学的情報を伝えるのではなく、相手と向き合い、相手の反応を見ながら丁寧に説明する、質問に答える、その過程の中で、相互に信頼関係が生まれ、信頼関係の高まりに支えられて、折り合いをつける作業が進んでいく。低線量被ばくによる確率的影響は科学的に解明されていないことで説明が難しいとはいえ、身体的影響に関しては多くの科学的根拠がある。その一方で、心理・社会的影響は多様であり、個別的で、イメージや感情に根付いているものも多く、それらが合理的判断を妨げる要因になっていることもある。「あいまいな喪失」や「スティグマ」といった複雑な心理・社会的状態にあることを理解して、支援をしていく必要があるだろう。

III. 放射線看護の教育からひも解く“現状と課題”、そしてみらいへ

看護基礎教育や継続教育、がん放射線療法看護認定看護師教育に加え、近年、放射線看護の高度実践看護師教育が一部の大学院で行われるようになった。近い将来、修了生の中から放射線看護を担う専門看護師が誕生することを心待ちにしている。

放射線看護が長い時間、連綿と大切にしてきた「患者さんと共にある」ということと、時代の変化やニーズに合わせて広げたり、深めたりする放射線看護の役割について、今一度振り返る機会になれば幸いである。非日常だったはずの「禍」がすっかり日常を侵食した現在、次に来る after コロナの時代を、どうコロナと共存していくかを考える岐路に立たされている。生きる上で大切にしたい、これまでも、これからも変わらないこと・変えられないことと、新しい価値観で考え、行動していくことを、うまくバランスをとってみらいを生きていく必要があると考えている。